ボートはボート

長月　夕子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ボートはボート

【Ｎコード】
Ｎ７６７０Ｂ

【作者名】
長月　夕子

【あらすじ】
これはこれ、それはそれ、ボートはボート。

今日のような天気の良い休日にあの人は、家族でディズニーランドへ遊びに行ったり、上野公園でボートに乗ったりしているのだろう。

ディズニーランドやボートは別れるジンクスがあるからと一度も行かない。もっともらしい理由をあの人は言ったつもりだろうが、そんな事、家族を思い出すからに決まっている。家族を捨てなければ、別れると何度口にしたろうか。今回の別れ話も、いつの間にかなし崩しに消えてなくなると、あの人は高を括っているに違いない。

日曜の朝九時半に、茶の間のテレビの前で頬杖をつきながら、私はそんなことをだらだらと考えていた。

「おい、美和子、多摩川へ行かないか」

そばで新聞を読んでいた父が突然そう言った。

土手の草はまだ枯れていて、歩くたびにかさかさ鳴った。ふきっさらしの風は思ったほど寒くなく、かすかな春の気配を感じる。

私の前を黙々と父は歩く。話し掛けようにもきっかけがつかめず、私達はそれほど狭くもない土手の上を一列になって行進していた。

父がやっと立ち止まって私を振り返った場所は、ボート乗り場だった。

「ボートに乗らないか」

きしむ船底を踏んで、腰が引けながらも恐る恐るボートに乗り込むと、父は軽い足取りで私の正面に座り、慣れた手つきでオールを手繰る。

「お父さんとこうしてボートに乗ったの、初めてだけど漕ぐの上手だね」

「そうか？ボートはたくさん乗ったからなあ」

「ふうん、誰と？お母さんと？」
「ふふん、いろんな人とだ。いろんな人と乗って、いろんな人が降りてそうしてお母さんと出会ったんだな」
「ふうん」
「うん、そうだ。そうなんだぞ、それだからなあ……」
父は一生懸命言葉を探していた。勘がいいわりに的外れなこの人は、私が失恋でもしたと思っているのだろう。私がよその家庭に忍び込み、すっかり奪い取ってしまおうとしているなんて思いもしないで。
「うわ！おとうさん！」
「おお！いきなり大声出すなよ、びっくりしたじゃないか」
「ねずみが浮いてるよ！」
猫ほどの大きなドブネズミの死骸が、ボートの横を流れていく。
「左旋回！左旋回！」
父は、オールをぐるぐる回す。
「やだ！お父さん、ボートが回っているだけだよ！」
私はむやみに声を張り上げる。
「お父さん！お父さんたら！」
「あれ！なんだ！この！」
ドブネズミの死骸は、やがて渦に巻かれて川底へ沈んでいく。
父がオールでたたく川面に、しぶきが上がってきらきら光る。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7670b/

ボートはボート

2011年1月15日21時09分発行